

分かり合おうと努力すること

三次市立川地中学校

第2学年 田端 こはる

分かり合おうと努力すること

三次市立川地中学校 二年 田端こはる

全ての人が分かり合えたらどんなに平和に暮らせるでしょうか。友達とのちよつとしたトラブルは減り、誰かの顔をうかがって過ごすこともなくなることでしょう。そして、世界で起きている争いも減り、悲しい思いをする人々もいなくなるのではないのでしょうか。しかし、そんな未来は今のままでは決してやって来ないでしょう。

私は、作家の上橋菜穂子さんの作品が好きで、新刊が出るとすぐに買って読みます。上橋菜穂子さんの物語は、人と人ではない生き物たちの触れ合いがある作品が多くあります。そんな、上橋菜穂子さんの本を学校の図書館で見つけて、「きつとおもしろいんだろうな。」と思い借りて読んでみました。

それが「狐笛のかなた」です。母を幼いころに亡くし、父のことについては何も知らない小夜という人間の少女が主人公です。小夜は、人の心の声を聞くことができる「聞き耳」の力をもっています。そして物語は、小夜が野火という名の霊力を持った獣を助けたところから動き出します。この物語に出てくるものたちは、皆二つのものの狭間で生き、相手から理解されない、相手を理解できないため苦しむ姿が描かれます。

「……わたしにも、わからない。会ったこともない人を。呪い殺せる人の気もちなんて。」これは、国同士の争いに巻き込まれ人々が殺されていくのを見た小夜が言った言葉です。私も理解できません。いや、正確に言うと、頭では理解しても、気持ちがついていきません。国同士の争いであるため、個人の考えなど反映できません。反映しようとすれば、逆に自分が殺されてしまう、ということになります。だから、やるしかないのです。しかし、やはり受け入れることはできません。国という大きなものの思惑に左右されて、人殺しの生き方を選ぶことも、また、国同士の争いに巻き込まれて突然大切な人を失わなければならない理由も。国という大きな単位で見れば、勝った負けたの世界に感じますが、その根っこには一人一人の人間がいるのです。お腹が空けばご飯を食べるし、夜が来れば眠くなる、同じ人間なのにどうしてこうも理解し合えないのでしょうか。争いがおこるのでしょうか。小夜の「わからない。」には、相手にも立場があり、どうにもできないことがあると分かっているからこそ悔しさがにじみ出ていて、私は、胸が熱くなりました。

人は一人一人違う、みんな違ってみんないいという言葉があり、今の世の中も多様化が求められています。しかし現実には、分かり合えないことがあると思います。日常生活で言えば、友達との見方や考え方の違いなどがあると思います。私も友達と話していて、言っていることは分かるけど、同意できないことがあります。今、私はソフトテニス部に所属しています。友達は、部活動の準備は一年生がすべきだと言います。自分たちが一年生の時にそう言われてきたし、準備や片付け、掃除から一年生は学んでいったほうがいいというのです。私も、昨年そうしてきたので友達が言っていることも分かります。けれど、私は、気づいた人がまず動いて一年生に教えていったほうがいいと思っています。一年生に

口だけで指示するのではなく、初めは見せながら教えた方がいいと思うし、全員で気付いた人が動く方がいいと思います。このように、二年生になり、先輩という立場になつてから、人との見方や考え方の違いに自分自身で気付くことが増えたような気がします。

だからと言って違う考えの人を拒絶したりはしません。日常生活でもこのような分かり合えないことはあるのですから、世の中にはもつとあるだろうし、思い入れが強かったり、意思が強かったりすれば衝突があるのは当然のことだと思います。

しかし、そこでお互いが相手を理解しようとすることをあきらめ、よそを向いてしまうと、そこから先はありません。お互いが相手に気持ちを向け続けていけば、分かりあえる機会はあります。分かり合えなくても、相手の態度を知ることができます。私は、相手と見方や考え方が違っていても、その差をうめられるよう努力していきたいです。

「孤笛のかなた」 上橋菜穂子 作 理論社

指導者の言葉

本校の研究主題は「主体的な思考力・判断力・表現力を育成する授業づくり 『かく』活動の指導・改善をとおして 」であり、各教科や領域、毎日の日記、行事終了後の感想などの指導に「かく」活動を積極的に取り入れている。特に国語科では、自分の意見や思いを書く際には、読み手を意識し、自分の経験や体験などと結び付け、今後の自分の生活につなげて書くことを指導している。

今回の作品は、国語科の夏季休業中の課題として作成したものと人権作文とを合わせ、再構成したものである。人間でありながら特別な力をもっている小夜の苦悩する姿から、「相手を理解するということ」について考えた読書感想文である。小夜の一言一言を受け止め、自分自身と結び付けて考える姿は、本生徒の誠実な思いを感じさせる。作品の終わりでは、「お互いが相手に気持ちを向け続けていれば、分かりあえる機会があります。」と述べ、「相手と見方や考え方が違っていても、その差をうめられるように努力していきたいです。」と結び、今後の自分の生き方につなげている。

他者と理解し合うことの難しさにも触れ、分かり合えないことを受け止めたうえで、それでも思いを分かち合い、共に未来をつくっていく必要があることに気付かせてくれる作品となっている。